

中山道を形づくる

戸谷家 宿場町と寄り添う一族

「戸谷家は、元を辿れば利根川沿いの廻船問屋で、後に〈花の木18軒〉と呼ばれた商売仲間とともに、現在の本庄宿周辺を開発した開拓者でもあったと伝えられています」。そう語るの戸谷充宏さん。江戸時代から約460年陶磁器販売を行っている

「戸谷家は、元を辿れば利根川沿いの廻船問屋で、後に〈花の木18軒〉と呼ばれた商売仲間とともに、現在の本庄宿周辺を開発した開拓者でもあったと伝えられています」。そう語るの戸谷充宏さん。江戸時代から約460年陶磁器販売を行っている



戸谷八郎左衛門正之(明治時代)
戸谷家11代当主。戸谷家中興の祖であり、町村制施行後の町会議員や、本庄商業銀行の取締役なども務めた。

「宿場町」、そして「繭の町」として繁栄した本庄。当時を生きた人びとの動きや思いをとおして、今もまちに息づく歴史・文化の根源を探る。

Interview



戸谷 充宏 さん
戸谷八商店店主。年に数回、「本庄まちゼミ」等で、中山道本庄宿の歴史を語り継ぐ活動を行っている。



戸谷八商店
1560年創業。約460年街道沿いで店舗を構える埼玉県最古の企業である。現在は陶磁器販売・不動産賃貸業を営む。

「戸谷八商店」の店主でもあります。当時の本庄周辺は、さまざまな勢力が入り替わり、争いの絶えな

「後ろ盾がない中で商人たちの間では自主独立しながらも、身分を問わない〈たすけあい〉の精神が培われました。それが後の宿場町の発展にもつながった面もあるのでしょうか。」

代々、本庄宿の名主を務めた戸谷家は、その後本庄宿のまちづくりに関わり続けました。明治・大正・昭和と激動の時代を経て、地域のつながりを大切にしながら、街道沿い

「江戸期以降も変わらず戸谷家はコミュニティを大切に、収益を地域の文化活動に還元し続けてきました」。ご自身も中山道本庄宿の歴史の歩み語る活動をされている戸谷さんは「本庄宿の歴史はとても厚みがあるのではなかろうか。」

中山道の宿場町、本庄と寄り添う

「江戸期以降も変わらず戸谷家はコミュニティを大切に、収益を地域の文化活動に還元し続けてきました」。ご自身も中山道本庄宿の歴史の歩み語る活動をされている戸谷さんは「本庄宿の歴史はとても厚みがあるのではなかろうか。」

特集 街道とともに生きる

中山道

「今は昔、中山道の宿場町」。旧本庄商業銀行煉瓦倉庫前に今も残る「ほんじょうかるた」の石碑に記された句です。

江戸時代以降、中山道とともに宿場町・繭の町と、まちとしての在り方を変えながら、発展を遂げてきた本庄。

その裏では、今も昔も街道に寄り添い、それぞれの思いを持ってまちに関わる人たちがいました。

今回の特集では、〈中山道の宿場町、本庄〉エリアの「昔」から「今」に至るまでを、街道沿いをめぐる人びとの動きをとおして知り、このまちを形作る魅力と、その理由を深掘りします。

★広報課 ☎ 25- 1155

Story 本庄宿の発展、日本の近代化に深く貢献した一族 諸井家



諸井家の人びと(明治時代)
写真中央が諸井家住宅の建て主である諸井泉衛、新奇を好む行動家だった。乳飲み子を抱いて右に座るのが妻である諸井佐久である。佐久は渋沢栄一の従姉にあたり、良妻賢母であった。

諸井家は戸谷家と同じく本庄宿周辺の開発に尽力し、〈花の木18軒〉と呼ばれる商人仲間として数えられた一族であった。江戸時代末期には東諸井、北諸井、南諸井の三家がそれぞれ本庄宿の発展に寄与していたが、現在も残っているのは東諸井のみである。

東諸井家は絹繭商として知られ、1874年に第10代の諸井泉衛が前島密等との縁で郵便事業に貢献している。その後も一族からは実業家や外交官、作曲家等を輩出、日本の近代化に貢献している。



諸井家住宅
諸井泉衛が横浜の洋館を手本に建築。当初は本庄郵便局と居宅を兼ねていた。埼玉県指定文化財だが、現在は原則非公開となっている。

城下町から宿場町、そして繭の町へ 中山道、本庄宿歴史概略



戸谷半兵衛(江戸時代)
本庄宿新田町(現在の本庄市宮本町~泉町辺り)に店を構えていた豪商。数多くの慈善事業を行ったほか、文化面でも影響力の強い一族であった。

本庄宿の誕生まで
本庄周辺は、平安末頃に武蔵武士団が出現し、児玉党の拠点となった。首領は庄(庄)氏を名乗り、分家が進むとともに本家は「本庄(本庄)」氏と名乗る。
戦国時代、本庄実忠の建てた「本庄城」の城下町として発展したが、1590年に豊臣秀吉の小田原攻めに伴い、落城。本庄氏は滅亡する。
その後、中山道の整備に伴い、小笠原信之の時代に新たに街並みが造られた。本庄城の廃城後、宿場町へと変貌を遂げ、ここに「本庄宿」が誕生する。
本庄宿は中山道六十九

次のうち、江戸・日本橋から数えて10番目であり、武蔵国最後の宿場町であった。
中山道は東海道と比べ山道は多いが、川が少なく安定して通行ができたため多くの旅人、諸大名の往来によって発展し、本庄宿も江戸時代後期には中山道最大の宿場町へと成長を遂げた。当時、戸谷半兵衛をはじめとした豪商は長者番付にも取り上げられ、本庄宿の繁栄は広く世に知られることとなる。
明治時代以降も、富岡製糸場に送る繭の集積地として発展を続け、当時首都の候補地を探していた明治政府の中で、本庄遷都論も浮上したそう。